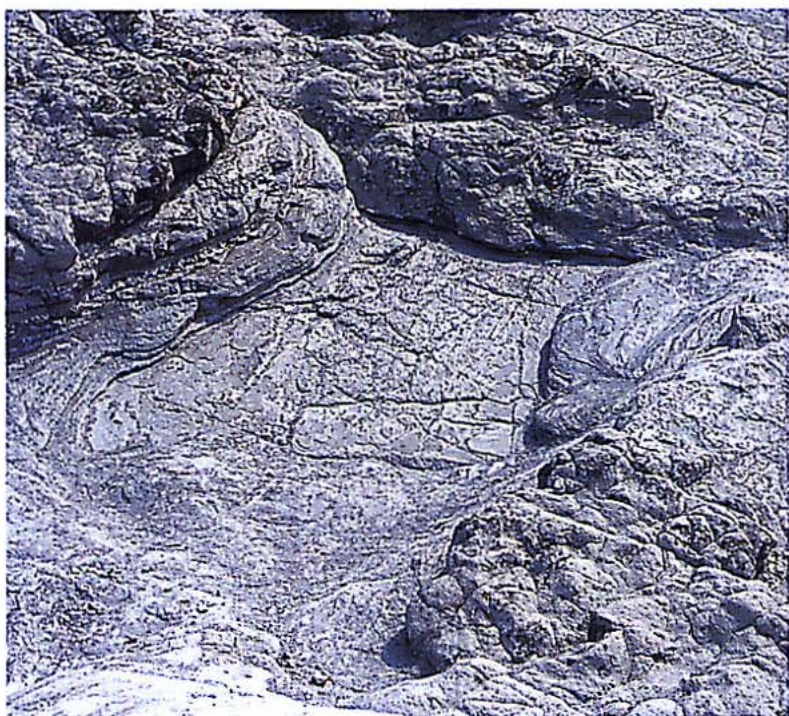




どんづるほう



「*Junmai no Ma*
Donjuzuru no
Utsunomiyama」が
造られたのと同じか。

香芝市の西方の山々に広がる「どんづるほう」は、その白い岩肌と松などの樹木の緑とのコントラストの美しさで知られ、金剛生駒国定公園にふくまれて、さらには奈良県の天然記念物に指定されています。休日ともなれば、その美しい景観を見ようとハイキングや遠足の家族連れや子供たちで賑わう格好の憩いの場となっています。

「屯鶴峰」と「屯づるほう」、このユニークなネーミングは、緑の松林の間に多くの白い鶴が点々とたむろしているように見えることを形容して名付けられています。ちょっと不思議な、珍しい風景を形作っている「どんづるほう」は、凝灰岩から成っているといえます。ではその凝灰岩とはどのようにして、そしていつ頃に形成されたものなのでしょうか。

謎は二上山にあります。二上山は古代から美しく、またさまざまな歴史の舞台ともなった山ですが、それとともに古代の人々にとって大切な生活道具の材質である三つの石を産出した山でもありました。一つはサヌカイト、また一つは金剛砂、そして凝灰岩です。すなわち「どんづるほう」と二上山は切っても切れない関係にあるといえるでしょう。

今から二千万年から千五百万年前頃、地質年代でいえば新生代第三紀中新世後期という遠い昔のこと、二上山が火山活動を開始して、多くの火山灰や火山弾を周辺に降り積もらせました。この頃に形成された地層がドンツルボー累層といわれ、なかでも「どんづるほう」付近のものは、上部ドンツルボー層と呼ばれています。

その頃は二上山の周辺には淡水湖が広がっていて、そこへ大規模な火砕流が流れ込みました。水中に堆積した火砕流の層が、それ以降の地殻変動などで隆起し、気の遠くなるような長い年月の間、風雨などの自然作用で侵食され、風化して、現在見られるような景観になったといわれています。

現在、「どんづるほう」の上に立って見ると、谷あり、山ありの起伏の激しい地形となっているのが見られますが、かつては湖の底であったというわけです。そして、真っ白な岩肌には波の跡のような筋目、紋様が見られますが、これは長い年月の侵食作用の跡と思われる。つまり「どんづるほう」は地球規模の自然史の中で見なければならぬほどの時間経過がある景観だといえるでしょう。その一か所、一か所の岩や石には、さまざまな姿形、美しい縞のような模様がありますが、そこには長い年月の壮大なドラマの跡が刻まれていることがうかがえます。

「*Donjuzuru no*
Utsunomiyama」が
私たちに語りかけつづけている。

「*Utsunomiyama*」を構成する凝灰岩は、熱に強いという性質や細工しやすいと

ドンツルポーから発掘された植物化石
(三上山博物館所蔵)



古代の人々が凝灰岩を切り出した跡の石切場遺跡



どんづるぼう近くの昔の太子道沿いにある磨崖仏



穴虫にある京都大学防災研究所の地殻変動観測所

いう利点から、人びとの生活に必要なさまざまなものに活用されて来ました。その使用はすでに遠く古代から始まっています。古墳時代の五世紀頃からの死者を葬る石棺には、「どんづるぼう」から切り出された石材が用いられています。とくに六世紀頃からは家形石棺に製作され、藤ノ木古墳など多くの古墳におさまっています。そして奈良、平安、鎌倉、室町と時代が下るにつれても、ここから採取された凝灰岩はさかんに石材として用いられ、法隆寺などの基壇の外、石仏、石塔など各種の石造物が残されています。

昭和十三年頃には「屯鶴峯駅」があったそうです。当時の年間乗降者数は、一、五九四名であったという記録が残っています。

また、先の第二次世界大戦中においては「どんづるぼう」の地下に軍事用トンネルが幾つも掘られました。

凝灰岩の切り出し跡にほど近いところ（穴虫）には、現在、京都大学防災研究所の屯鶴峯地殻変動観測所が設けられ、トンネルは地震研究などに平和利用されているということです。ここでは地殻変動の観測を通じて、地殻変動と地震発生との関係の究明や地震エネルギーの蓄積・解放過程を明らかにし、地震予知の方法を確立するために観測研究が行われています。

このように「どんづるぼう」は私たちにとって、ただ単に美しい景観をもたらすだけでなく、深く歴史にかかわってきているのです。



「七つの誓い 黒水仙の巻」のどんづるぼうが舞台となったシーン(写真提供/東映太秦映画村)

「どんづるぼう」は

映画のロケ地だった。



当時のポスターを手に思いでを語る國定さん

「いつどんな映画で行ったのかは、覚えていないのですが、白い岩が照り返して暑かった印象が強いですね。京都から自動車で揺られていくのですが、その間眠れるのが楽しみでした。年間百本以上の映画を製作していた時代ですからね」と太秦映画村の資料室で國定さんは笑いながら語ってくれました。

「どんづるぼう」の風景が重宝された時代がありました。それは日本映画界が娯楽の殿堂として燦然と輝き、全国各地の映画館で大勢の人達がじっとスクリーンを見つめていた時代。あの錦ちゃんや千代介が、嵐寛や千恵蔵がスクリーン狭しと暴れ回っていた東映時代劇映画の黄金期です。その当時、スタッフとして、「どんづるぼう」での撮影に参加していた人に、映画村映像文化センターに勤めていた國定玖仁男さんがいます。

当時、時代劇映画のロケ地は京都市内にもたくさんあって、普段のシーンなら遠出の必要もなかったそうです。しかし、ちよっと変わった風景や荒涼とした風情を出すためには、「どんづるぼう」のような風景が必要でした。「どんづるぼう」と同じような雰囲気のある所には蓬萊峡があつて写真で見ると岩と崖の風景がよく似ています。この写真は錦ちゃん(萬屋錦之介)と丘さとみさんですが、たぶんどんづるぼうだと思えますよ」と見せていただいたのが「七つの誓い 黒水仙の巻」(昭和三十一年)の写真。よく見ると、露出した白い岩肌や遠くの山々の山際が、「どんづるぼう」であることを示しています。和洋折衷のような映画にぴったりの風景だったでしょう。